

美術専攻 立体芸術研究領域

マキノ ミヤビ

牧野 雅



歩める女

塑造、アクリル絵具、ジェスモナイト、手鏡、方位磁石

歩める女

自身の経験をもとに、社会と自分の間に生じたトラブルから、負の感情をエネルギーへと転換し制作している。本作のねらいは、芸術分野に限らず、現在も幅広い分野で、繰り返し引用され続ける古代ギリシャ神話を、フェミニズムの観点から同時代性をもって解釈し彫刻表現として提示することである。元より、彫刻分野と古代ギリシャ神話の結びつきは強く、ヴィーナス像やラオコーン像など神話上の人物をモチーフとした石膏像に触れる機会は、アカデミックな場において数多く存在している。日本人の女性としてこの時代に生まれ、彫刻分野を選択し学ぶなかで、ギリシャ神話に描かれる女性像のあり方に疑問を感じ、同時代性をもった自立した女性像を生み出したいと考えた。そのなかでも「怪物」として語られてきたメデューサに着目した。メデューサは、元は普通の人間だった。彼女は、普通の日常生活を送る上で、美しいと評判だった髪が神ポセイドンの目に止まり女神アテナの神殿で襲われた。神殿を汚されたことに激怒した女神アテナは、権力者である神ポセイドンのことは咎めず、メデューサに対してのみ罰を与えた。彼女は冤罪をかけられ見たものを石にする怪物へと変えられたのちに、英雄のペルセウスに斬首される。そしてその首は、色々な人が武器として使用し続ける。本作は、イタリア・フィレンツェのシニョーリア広場に現存する《メデューサの首を持つペルセウス像》に立ち向かう存在になるように制作した。同像は、十六世紀に当時の権力者が他の権威を牽制し、自らの力を誇示するため、「怪物を打ち倒す英雄」として作られたものである。力の象徴として切り取られ、掲げられたひとつの首は、今もなお英雄の手の中にある。大昔に首を失った彼女は自らの首を求め、歩みを続ける。それは北西へおよそ九千八百キロメートル、二十一世紀の日本から十六世紀のイタリアへと向かう、時空を越えた歩行である。